

かく迎え、一日でも早く島の暮らしにとけ込めるような配慮がなされている。あらゆる活動には人間的なあたたかさや、元々ある人と人のつながりが基盤となっている。

サービス先行型や行政主導型の都市部にはみられない「人間的なあたたかさ」や「地域の人々のつながり、支え合い」を若い世代に伝えていくことが今後も期待される。

(2) 沖縄県宮古郡における1960年代からの地域共同に根づいた世代間交流・継承にみる多産要因の一考察－池間島を事例として－

1. はじめに

宮古郡の出生率が全国のなかでも高いのはなぜだろうか。調査結果の分析を試みると、まず「子は宝」であるという宮古の風土、近所での助け合いなど地域内での共同があることが要因として挙げられる。また、母親が子どもの頃に受け継いだものを自分の子どもに受け継がせようとする世代間交流・継承が原動力として見出される事例もあった。たとえば、「池間のよさを伝えていきたい」、「おばあになったら多くの家族に囲まれることを夢みている」などがそれである。

つまり、地域共同、世代間交流・継承が多産を促す要因になることが今回の多産に関する聞き取り調査で浮き彫りになったのである。

なお、昔から世代間交流・継承、地域共同はあり、歴史とともに変遷しながらも宮古ではまだかろうじて残されているに過ぎないということにまず留意しておかなければなるまい。とりわけ、1972年の沖縄本土復帰後に至っては、地域共同、世代間交流・継承を包含する「共同体社会の分解は急速に進んでいる」¹と谷川が述べているように、共同の基盤は崩れてきた。なぜか。時間を遡れば遡るほど相互扶助が生きていくためには必要であり、それを共同体社会が担っていたが、相互扶助そのものの必然性が薄れてきたからである。

だが、谷川はこうも指摘している。「意識は社会の変化よりもはるかにながく、生きのびる」²と。谷川はこのことを共同体社会と文化を結び付けて論じている³が、同じようなことが共同体社会と相互扶助においても応用できるのではないだろうか。つまり、宮古では相互扶助でなくとも生きられるとしても共同体社会の良さが意識されているがゆえに、それを保とうとするのではないだろうか。結果、まだ地域の共同や世代間交流・継承を垣間みることが出来るのであろう。

以上のことを踏まえ、ここからは、1960年代からの世代間交流・継承と地域共同について説明を加えながら、世代間交流・継承が地域共同に根づいたものであることを明らかにし、そのことは子どもが育つ過程においてどんな意味を持つのかを掘り下げてみていく。その上で、世代間交流・継承の基盤と構造を明らかにし、それを支えるものは何であるのかも考察しながら本土にも普遍化し活かせる方向性を探してみたい。

なお、今回は聞き取りをした宮古群のうちの池間島に焦点づけて書いていく。その理由は第一に、宮古群の中でも部落が違えば方言が違うように、地域性が異なるからである。部落ごとに固有の地域性が発見できるため、宮古という枠組みで捉えるのに限界が生じる。第二に、著者が2005年2月に池間島にて独自に聞き取り調査⁴を行っており、そこでの事例を活用しながら、織り込んでいき、具体性を持たせたいからである。

時代区分を1960年代としたのは、先述したように、復帰前の方が地域共同、世代間

交流・継承の原点に近づき、なおかつ、今回宮古にて先に行われた聞き取り調査の対象者である多産の母親たちの子ども時代とも重なるからである。

本論

1. 地域共同に根づいた世代間交流・継承と子育て

では、まずなぜ世代間交流・継承という言葉を使用するのかについて説明していく。交流とは人と人のつながり、世代でいえば、世代間相互の横のつながり関係をさしている。そこでは相互に影響し合うことが予測される。

継承には二通りの意味があると考え。ひとつめの意味は、習俗や人との交わりなど何らかのことが世代から世代へと受け継がれ伝えられるということをし、世代間にみられる縦のつながりをいう。この意味では広義的な伝承とも言い換えられるかもしれない。もうひとつの意味は、一つの世代が子どもを産み育てることで、次の世代ができ、世代が継承されていくということである。所謂世代継承と言えよう。

また、横のつながりがなければ、縦の継承も難しいと考える。すなわち、ひとつめの意味でいえば、交流を基盤にして何かが継承されていくと思われる。もうひとつの意味でいえば、交流は多様な人とのネットワークの構築を前提としているが、それが次世代を育成しようとする力につながると考える。このことについては後に詳述する。

本稿ではよい出産・子育て環境が多産につながるという仮説に沿って、交流あつての継承という観点から世代間交流・継承が適宜であると判断し、使用を試みる。

なお、一般的には世代間交流ということが多く、たとえば、老後の地域社会における自己実現・社会参加と関連付けて論じられてきたように、とりわけ高齢者問題で多く取り扱われている⁵。しかしながら、そうした中では交流と継承との位置関係、関連性は明確にされてこなかったのではないだろうか。

本稿においては、世代間交流を継承の必要条件とし、世代間交流・継承を地域の共同との関係でとらえなおし、継承の基盤に交流があるということを実際立たせてみたい。

元来、なぜ世代間交流・継承の必要性があるのだろうか。それは地域の共同を紐解いていくことでわかってくる。なぜなら、横のつながりという意味では、交流は地域内の人と人との共同に根ざしたものであるからだ。そのことを具体的な事例を挙げながら説明していこう。

たとえば池間島では、出産予定の時期になると、「シラウマツ」⁶(枯れた木、薪のこと)を燃やすという。その火は出産後の身体を温めるために使用するが、出産予定日の何日も前から焚かれているので、その匂いで島中の人はいよいよお産があることを知る⁷。出産時には、頼まれなくとも島じゅうかぎつけて来るし、手伝いをするのが自然な慣わしであった。互いに助け合いをするのは、当然のことであると思われていたし、離島であり、現代ほど医療の発達していない時代においては、助け合わなければならなかったのである。

祝いの気持ちを表明するのは金銭ではなく、ものや気持ちによった。また、島中の人

集まるため、祝いの席が自然発生的な人と人のかかわり・交際、いわば交流の場でもあった。このように交流は地域共同に根ざしたものであった。

その地域共同は相互扶助と表裏一体であった側面を持っている。相互扶助がなければ生きていけなかった時代においては、その精神が生活共同体のなかに色濃く浸透していた。つまるところ、共同で生きていかなければならず、継承もしなければ、生きてゆくことができないと考えられていた。人が人によって生かされ、それを肌身で感じ得た時代であった。したがって、池間島という地域で暮らしている人たちに島民をどう思っているのかと聞くと、みな家族や親戚のようなものだと一様に口をそろえていうのもうなずける。

このような地域の共同に根づいた形の世代間交流・継承は子どもの育ちにとってどういうことを意味しているのだろうか。第一に、相互扶助によって島が成り立っていることを継続させてゆくためには、いずれその担い手となる次代の子どもにも意識的に「伝える」必要があった。言い換えれば、代々受け継がれてきた島を維持するためには、子どもが必要であるし、だからこそ子どもは「島の子」として育てられた側面がみられる。

第二に、島という地域共同の中で育つということは、後述するように島での多様な人々による濃密なネットワークのなかで子ども時代を過ごすこととなる。島での産業が活気づき、島に生き、島で人生の一生を終えられた時代は、なおさらそのネットワークは蓄積されていったであろう。

だが、島の主幹産業であるカツオ漁の収穫高が落ち込み、相互扶助で仕事を分担しなくなるなかで、仕事を求めて島外に出るほかなくなった。その結果、漁村においては、過酷な児童労働を背負わされる農村よりいち早く教育熱が高まったのではないだろうか。それは同時に、島に過疎化をもたらすことにもなったし、世代間交流・継承対象である子どもを島から失うということでもあった。

このように産業構造の変化によって地域のあり方が変わるということからしても、地域共同は暮らしや産業と密接に関係していることがわかる。地域の共同に根づいていた世代間交流・継承もまたしかりである。

2. 池間島における世代間交流・継承の構造と多様な関係性

次に、1960年代からの池間島における世代間交流・継承をみていきたい。通常、「世代」といった場合、子ども、若者、大人、高齢者がその層として想定されるが、おそらく何かを継承されることが最も多かったのは子どもであろう。また、ここでは子育てに関することを述べているため、子どもを基点とした時に、誰が、どんなことを通して受け継がせるのかその一部について具体例を挙げながら若干説明を加えたい。子どもが育つ過程で、世代間交流・継承にどんな人がかかわっているのかがイメージされやすくなるであろう。

- ① 子どもの同年齢集団、異年齢集団⁸のなかの友だち、先輩から。遊び、子守り、「トゥンカラ」⁹を通して。

トゥンカラとは、一緒に寝ることをいい、大休小学校の高学年くらいから始まる。

一緒にトゥンカラをするグループの中には、一、二歳前後年齢差がみられることもあるが、中核は同年齢の場合が多い¹⁰。トゥンカラでは、血縁関係にない者同士が一つ屋根の下で一緒に勉強をしたり、遊んだりしたという。毎朝起きて祈願していたらみんな高校に受かったという思い出話を語ってくれた人もいた¹¹。

- ② 高齢者から。昔話、民謡、一緒に暮らすということを通して。

たとえば、子どもたちは暇があるとよく近所のおじいやおばあの手伝いをした。おじいやおばあも何かあると子どもを家に招いて来て食べなさいと言ひ、ゆがたい(昔話)をよく聞かせていた。

- ③ 大人から。池間じゅうにいた親代わり、手伝い、近所づきあい、「里家(サトゥヤー)」¹²を通して。

里家とは、隣り合った家であり、「池間島を構成する社会組織の最小単位」¹³となる。そこでは色々なことを協力し合うわけだが、子どもも里家には自由に出入りしたり、何かあると遊びに行ったり、手伝ったりしていた。

- ④ “先祖から”。「ヤーヌナ」¹⁴の名づけを通して。

ヤーヌナとは大和名のほかに持つ先祖または神の名をいい、旧正月等の年中行事の時にはその名をもらったところへお供えをしにいく¹⁵。確かに、子どもと先祖との直接的な交流はないものの、この名づけは、継承という観点の中に、先祖の代々から伝わるということがあるという表れなのではないだろうか。すなわち、世代間交流・継承というのは、原点を「今」に置いているのではなく、遠い昔から伝わるもので、それを大切にしている証であるともいえよう。とりわけ、古くからある年中行事や神事に関してはその傾向が強いかも知れない。だとすれば、「継承」されていく事柄の一部は古い昔からまだ見ぬ未来へとつなげようとするものであるといえるのではないだろうか。たとえば、昔から歌い継がれている民謡の特徴として共同体の繁栄を願うものが入っている¹⁶ことが挙げられるのも島が未来へと代々継承されるのを切望している例である。

このようにしてみると、子どもが育つ過程では、実に多様な層とのかかわりがあり、影響を受けているということがわかる。つまり、まず地域の中で網の目のように張り巡らされた人間関係が前提としてあり、そこに近所づきあいや年中行事などといったきっかけが入ってきて、それとの相乗効果で世代間交流・継承がいつそう活発になるといえるのではないだろうか。

こうした縦横無尽な網の目のような人間関係は地域の共同にもとづいている¹⁷。子どももそのネットワークに組み込まれているがゆえにいろいろな層から影響を受けやすくなる。

さまざまな人が子どもとかかわるということは、親にとって子育てに変化をもたらし、子育てが孤独にならず楽になるということの意味している。また、子どもにとっても安心感と居心地よい場が多くなることにつながるのではないだろうか。同世代、異世代を含めた多様な他者にかかわり世話を受ける環境が、次世代育成力を生み出す¹⁸ことが既に報告

されているように、さまざまな人とのかかわりがあるということは今の育児を支えるのみでなく、次世代の育成をささえようとする原動力にもなり得よう。

世代間交流・継承がこうした地域共同にもとづいた多様な人間関係に支えられている以上、その全体的な構図としては、お年寄りから大人へ伝わるものもあれば、大人から子どもへ、お年寄りから子どもへ、などもあって、年齢幅の小さなものから大きなものまであるのは自明の理であろう。

たとえば、お年寄りから大人へというのは「ミヤークツツ」¹⁹がその例である。ミヤークツツとは、主に55歳以上の男性が関わる年中行事であり、そこでは最高齢の人が絶対的権力を持ち、指導にあたっている²⁰。

ここでは子どもに関することに重点を置いているので、詳述は別の機会にしたいが、大人はミヤークツツの時のように、お年寄りから伝えられる(受け手)、若者や子どもに伝えていく(発信側)の双方の側面を持つ。

よって、子どもにしてみれば、大人から何かが伝わる時は、大人が伝えたかったことにお年寄りが大人に伝えたことを合わせて考え抜かれたことが伝わることになる。このように世代間相互の年齢幅が一定ではなく、柔軟性をもつがゆえに、いくつかの層を通して子どもに継承されていくということがある。

だが、一般的に「世代間交流」においては、子どもと高齢者に関する取り組みがクローズアップされることが多かった²¹。増山が地域での「子ども・高齢者問題と世代間交流の動向」²²を関連付けてまとめているように、世代間交流は子ども・高齢者という枠組みで捉えられがちだったのではないだろうか。

しかし、先述したように世代間交流・継承の基盤には多様な人がかかわるネットワークがあり、子どもは多様な関係性のなかで育っている。いわば地域ぐるみで子どもが育てられている。敷衍すれば、世代間交流・継承は子ども・高齢者という枠組みのみでは捉えきることが出来ず、さまざまな人がかかわっているといえるのではないだろうか。それだけ世代間相互の関係性は可塑性を持っている。実際、既にみてきたように世代間相互の関係性は常に同様ではない。

3. 原風景が支える地域共同、世代間交流・継承

時代の移り変わりとともに、今は確かに相互扶助はなくとも、「生存できる」時代にはなった。それにともない、相互扶助を支えていた地域共同の必然性は失われ、世代間交流・継承ともに衰退の一途をたどっていった。こうして人間味や多様な層による子育てのネットワークが失われていきつつある。

だが、宮古では地域の共同や世代間交流・継承の力は弱まりつつあるものの、まだ部分的であれ残されているし、多産の土壌を育んでいた。

その残存を支えたものは何であろうか。それはまさしく今の親世代の原風景によるところが大きいのではないかと考えられる。先述したように、地域の人とふれあう場が多く、

いろいろな世代とのかかわりのもとに子ども時代を過ごしてきているため、自分が親となってからも自分の子ども以外の子どものにも積極的にかかわろうとするのであろう。

また、「ほかの子どもが育たないと自分の子どもも育たない」²³という思いは、次のような原風景に裏打ちされたものなのではないだろうか。つまり、自分が子ども時代に仲間にも囲まれて遊びつつけんかしつつ育ってきたというものである。

そして、そのとき培われた絆が今でも保たれているということが、原風景の良さを改めて確認させてくれるであろう。たとえば、今でも引越しがあると頼まれなくても加勢するし、「モアイ」という月一回の同期同士の集まりは欠かせないという²⁴。

こうした今も続く頼もしい関係性と原風景があるからこそ、地域共同に根づいた世代間交流・継承を維持しようとするのであり、その基盤となる地域の多様な関係性がまだ比較的保たれているのではないだろうか。

まとめ

ここまで述べてきたことを改めて整理する。まず、地域の共同に根づいた形で世代間交流・継承があり、そこには網の目のような人のネットワークがあったことが明らかになった。また、そのようなネットワークが子育てを楽しく安心できるものにさせているため、多産を促進させる要因になり得た。そうした人とのかかわりを受け継がせようとするのは原風景が影響してくると考えた。

最後に、本土にも普遍化できる方向性を考えてみたい。そもそも本土では原風景を描けるような世代間交流・継承はなかったのであろうか。いや、そうではないだろう。戦後すぐの本土には相互扶助で生きてきた時代があった。ただ、高度経済成長以降は、暮らしのスタイルが変わり、とりわけ都市部においては共同体そのものが衰退し、今となっては、もはや消え失せてしまったという方が適当なのかもしれない。その流れの中で、世代間交流・継承の力ともども衰弱してきた。

一方、宮古では、「地域共同」、「世代間交流・継承」がまだ少なからず根づいており、都市部と比較すればまだしも多産を促進させる要因となっていたと考えられる。その背景には原風景に支えられた地域共同の良さを広めたいという意識がある。しかも、そうした意識を助長する地域における多様なかかわりがまだ少なからず残っている。

そして、改めて注目しておきたいのだが、多様な関係性が子どもを産み育てたいと思う環境を醸成し、出産後の地域による自然な継続的支援の基盤を担っている。

だが、本土の中でも特に都市部では、共同を支えようとする意識の芽生えを育てるような関係性は弱まり、皆無に等しくなってしまった。したがって、まずは、関係性の再構築が課題として挙げられる。

なおかつ、世代間交流・継承の根幹にかかわる多様な関係性の再構築を考えた場合、前述の通り、多様な層による網の目のような人間関係が前提として必要であり、そのためには色々な層への働きかけが必要となる。実際、地域には色々な世代がともに暮らしている

のであり、子どものみ、高齢者のみ、大人のみの支援では相互を繋げるのに無理が生じるのは必至である。

増山が「地域の日常生活圏の中で、①『子ども』と『大人』と『高齢者』という三世代のつながりと交流」²⁵を生み出すことを全国の一共通課題として提起しているように、色々な世代層がつながる契機づくりをいかにしていくのかが問われている。しかも、子どもを含めた世代が世代間を自由に行き来できるような土壌づくりが求められているのではないだろうか。

そのためには、専門を越えた学際的かつ総合的な視点が必要である。なぜなら、先述したように地域の共同を考えた場合、労働や暮らしそのものと切り離して考えられないからである。地域の共同に根づいた世代間交流・継承もまた同様である。よって、行政の垣根や専門性を越えたところでのつながりや提言が必要となつてこよう。

つまり、世代間交流・継承を想定した色々な人と人とのネットワーク、すなわち、縦横無尽な関係性の再構築を可能にするには、支援が細分化、分断化されたような状態では困難をきたすと思われる。

したがって、これから実践予定のワークショップなどでは、多様なネットワークづくりの役割を大いに果たしていきたい。また、政策としては領域ごとの持ち味を活かしつつも総合的な視点から住民側による関係性の再構築がしやすくなるようなしかけの展開を図っていく必要がある。

1 谷川健一『沖縄』講談社学術文庫、1996、P50。

2 同前、P51。

3 同前、PP48-51。

4 なお、この調査は池間島を事例にして地域で子どもが育つとはどういうことかを明らかにすることを目的としたものであり、修士論文の作成に向けて2005年1月30日から3月5日までの間に実施したものである。

5 高橋均「しなやかな世代間交流を『核家族』の新しいあり方」松原治郎編『日本型高齢化社会』有斐閣、1981。財団法人長寿社会開発センター『高齢化社会の世代間交流—世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究—』1994。青井和夫『長寿社会を生きる—世代間交流の創造』有斐閣、1999、など参照。

6 野口武徳『沖縄池間島民俗誌』未来社、1972、P278。

7 半構造化インタビュー、2005. 2. 14、話者、60代・女、聞き手、澤麗子。以下聞き手、同じ。

8 一般的には子どもはひとつの世代として捉えられるが、ここでは、あえて子ども間の同年齢・異年齢集団を取り上げた。なぜなら、この文脈では、子どもの育ちにかかわる交流、ネットワークを描くことを目的としているし、たとえば、異年齢集団の中で遊びを通してそのルールが継承されるということが考えられるからである。

9 前掲、野口武徳、P285、PP348-349。

10 同前。

11 半構造化インタビュー、2005. 2. 8、話者、40代・女。

12 前掲、野口武徳、PP311-312。

-
- 13 同前。
 - 14 前掲、野口武徳、PP281-284。
 - 15 同前。
 - 16 譜久村寛仁「宮古の歌謡に見られる社会相の考察—特に池間部落について—」宮古郷土史研究会編『宮古研究』第2号、1980、P15。
 - 17 佐藤一子『子どもが育つ地域社会 学校五日制と大人・子どもとの共同』東京大学出版会、2002、P7。
 - 18 齋藤幸子・星山佳治・宮原忍「少子化社会における次世代育成力に関する調査」『保健医療科学』2004年53巻第3号、国立保健医療科学院。
 - 19 前泊徳正他著『池間島のミャークツツ(沖縄県選択無形民俗文化財記録作成)』池間島民俗保存会、1981。
 - 20 同前、P11。
 - 21 社団法人エイジング総合研究センター『平成5年度世代間交流に関する調査研究報告書』(平成5年度／総務庁長官官房老人対策室委託調査)1994。広井良典編著『「老人と子ども」統合ケア』中央法規出版、2000、など参照。
 - 22 増山均「〈子ども・高齢者〉問題と世代間交流の動向」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第49号、2000。
 - 23 半構造化インタビュー、2005. 2. 9、話者、50代・女。
 - 24 同前。
 - 25 前掲、増山均、P89。なお、増山は世代間のつながりをもとにしながら、「『昔』と『今』と『未来』という三時代を見つめ、検証し、新しい地域ビジョンをつくり、楽しさと誇りとぬくもちを実感できる人々の連帯を創造していくこと」も全国共通課題として掲げている(P89)。

分担研究報告書

少子化対策への提言

相互関係性の継続を取り入れた科学教育の必要性について

埼玉県熊谷保健所

柳澤秀明

はじめに

著者はこれまでに「現代科学と世代断絶の関係」を報告し、絶対思考と時間停止思考が同一であることを理論説明した¹⁾。完全再現性を前提とする現代科学の裏には絶対思考が隠れている。それ故、現代科学に染まると、無意識で時間停止思考に陥ってしまう。絶対思考、すなわち時間停止思考は不変を求め経過を無視するので、子供や育児を無意識に否定してしまう。未来や経過に価値を見いだせない。その表現型の1つが出生率低下で、出産や育児へ完全を求めるための不安がその原因になっている。つまり、少子化と現代科学思考は表裏関係にある。そのために、現代科学思考に染まった者では有効な少子化防止対策を提案できない。そこで、修正カオス理論で現代科学の過ちを指摘するとともに、少子化防止対策案を提示する。

本論

1. ニュートンとライプニッツ

絶対思考と時間の関係はニュートンとライプニッツの論争にまで遡る。物理学者ニュートンは「決して観測できない空間と時間の存在」を信じていた。すなわち、観測結果とは無関係の「神の絶対時間と絶対空間」である。それに対して、哲学者ライプニッツは「決して観測できない空間と時間の存在」を否定した。ライプニッツは「時間は変化で誕生する」と考えた。

2者の思考で「観測結果が常に不変な物」を考えてみる。ニュートンの思考では不変であっても神の時間は存在するので、生物は生存が可能になる。例えば、写真はビデオと異なり、短時間では変化しない。その変化しない写真だけでも、神の時間を認めている。写真を生物に置き換えると、生物が感じる時間が停止しても神の時間は流れる。生物にとって時間停止は科学的には死を意味するが、神の時間が

あるのでニュートン思考では生物の生存否定にならない。もっとも、ニュートン自身がそこまで考えたわけではない。彼はこの矛盾を意識できなかった。

一方、ライプニッツの思考では不変なら時間も存在しない。不変な写真からは時間を観測できないが、ビデオからは時間を観測できる。不変の写真状態では死として生物の存在が否定され、時間経過で変化するビデオの状態でなら生物の存在が可能になる。勿論、ビデオが生物という意味では無く、変化＝時間が無ければ生物が存在できないという意味である。

このように、ニュートンの思考には現実と神という分離した思考が共存している。ライプニッツが科学界で無視されたこともあり、こうした分離2重思考の基で現代科学が発展してきた。著者はストレスと病気の研究からストレス方程式を構築したが、その方程式から導かれた時間はライプニッツの思考と同じである²⁾。

2. 完全再現性思考

次に、現代科学と完全再現性の関係を説明する。絶対思考が隠された現代科学は、完全再現性のみを追求して発達してきた。絶対思考では変化を認めることはできない。そして、現代科学はその精度が高かったために、人々は完全再現性の存在を信じている。ニュートン力学に代表されるように、「ロケットの着地点は正確に予測される」と誰もが思っているだろう。教育現場で行う机上試験は、正解が決まっている。試験した場所、時間、試験回数、受験者等で正解が変わることは許されない。つまり、現代科学に従う現代教育は、無意識的に完全再現性（コピー）思考を植え込むことになる。

3. 非再現性思考

ところが、完全再現性は特定の条件でのみ成立するのであって、絶対では無い。ロケットは計算と必ず異なる場所に着地する。科学者はそれを誤差と表現するが、その誤差こそが完全再現性を否定する事実である。あらゆる時計も環境で狂う²⁾。完全再現性を否定する理論の代表はカオス理論である。完全再現性を前提にしたニュートン力学等は単なる近似理論である。カオス理論的に試験を考えると、場所、時間、試験回数、受験者等の環境設定が異なれば、正解も必然的に変化することになる。

4. カオス理論と修正カオス理論の相違³⁾

「カオス現象は変数3以上で発生する」と理解されているが、単なる変数3以上ではカオスにならな

い。変数のうち2つ以上が相関変数関係であることが必要条件である。相関変数関係とは、変数同士がお互いを変化させる関係であり、簡単にはキャッチボール関係である。それに時間必須を加えたのが修正カオス理論である。方程式で示すと、 $Y(t+dt)=f\{X(t)\}$, $X(t+dt)=g\{Y(t)\}$ となる。簡単には、「{現代科学} + {相互関係性の継続} = {修正カオス理論}」になる。

5. 世代と地域の断絶

次に完全再現性と断絶の関係を説明する。完全再現性はコピーであり、環境の相違でも不変であることを前提にしている。環境変化の無視であり、経過や経験の無視になる。「何時、誰が、何処で、何を、何故、どのように」やっても同じ結果になる訳だから、5W1Hは必要無い。「常に同じ」は無変化なので、絶対存在になる。他との関係で変化することは無いので、関係性も不必要になる。5W1Hの不要は、「何時」としての世代間関係を無視し、「何処」としての地域関係を無視することになる。「{現代科学} = {修正カオス理論} - {相互関係性の継続}」であるから、世代や地域の関係性が消失するのは当然なのだ。

6. 世代断絶と少子化

完全再現性思考は絶対思考のことであり、時間停止思考と同一である。そのため、無意識に時間経過を認識し続ける生命を否定する。自分の時間を重視して次世代を考えないのは、継続の意味からすると生命の否定になる。生命が最重視してきた経過や経験（関係性）、すなわち「命の伝達」を否定することになる。小学生33人中の28人が「死んでも生き返る」と答えた報道があったが、継続の意味を理解できていない証拠だろう。現代科学はカオス理論を除いて時間の逆行を認めている。調査⁴⁾によって出生率低下の理由としては、出産・育児・教育費の高騰やそれらへの不安等が挙げられているが、根本には無意識に植え込まれた完全再現性思考が要因である。結婚・出産・育児を経験していない者にとって、それらは未知の現象であり、完全な指標も無いことから自己判断せざるを得ない。完全再現性の植え込みは完全思考を誘導し、出産や育児に対しても「完全」を求めさせてしまう。完全思考に染まった者にとって、未知への自己判断は最大の苦痛になる。反復テスト等で完全思考を植え込まれた者が、「完全正解が無い」ことを理解することは極めて困難である。出産や育児での「完全」に対する不安を回避するには、生まないに限る。調査で少子化の原因とされる出産・育児・教育費の高騰やそれらへの不安等は、「植え込まれ」が根本原因である。生きるだけに注目すれば、日本で飢餓によって子供を餓死さ

せる心配はないし、誤った入れ知恵が無ければ不安も無いはずだ。絶対思考の植え込みは「完全正解」に対する強い不安を生じさせる。

7. 少子化対策への提案

カオス理論的には完全再現性が否定される。しかし、教育現場ではカオス理論の存在が浸透していない。相変わらずに、ニュートン力学等に代表される絶対科学のみが教育されている。特に幼少時期に絶対科学のみを教育することは、裏に隠れた絶対思考を植え込んでしまう。「1. ニュートンとライプニッツ」でも述べたが、絶対思考は現実と神の分離2重理解という病的状態なのだ。絶対思考と強い不安は一体であることから、不安の解除には絶対思考の過ちを理解させることしかない。幼少時期に非再現性科学の思考を教育することが、絶対思考の否定と完全再現性の否定を理解させる有効手段だろう。昔は非再現性思考を家族や地域で伝達していた。しかし、学校に教育を任せた結果、学校では科学絶対思考を植え込んでしまった。完全再現性の前提は単純な机上試験を可能にし、単純評価も可能にする。完全再現性を否定すると、試験や評価が非常に困難になる。しかし、現代文明社会で大問題になっている地域や世代と断絶する生命の過ちは防止できるはずだ。現代科学思考に染められたなら、現代科学思考が原因である問題に解決案を提示できないだろう。少子化対策には絶対正解の存在を誤解させる教育への変更が必要条件である。カオス理論的教育が不安を軽減させる。具体的には、会話や肌の触れ合い等の継続、すなわち体験による相互関係学習の重視である。少子化は、近似理論に過ぎない現代科学思考から誘導される当然の結果なのだ。

結語

地域や世代間の断絶は、相互関係性を無視した現代科学思考と表裏関係である。完全再現性を前提にした現代科学思考を植え込まれた文明人は、出産・育児へ完全を求めることから、出産・育児に対して強い不安を持つ。結果として、少子化が進む。よって、世代断絶や少子化への対策は、相互関係性を考慮可能な非再現性のカオス理論思考を教育することである。

注 …… 修正カオス理論

カオス理論は、「同じ方程式を計算したのに、何度計算しても答えが常に異なる状態」を証明した。台風の進路予測が良い例で、台風の奇跡は一本の確定曲線であるが、予測は範囲図になっている。ニュ

ートン力学等は常に単一正解になるので、一本奇跡部に相当する。カオス理論では変数3以上がカオスの条件とされているが、それでは不十分である。これは天体の運動予測や天候予測の方程式を解く時に、方程式中の共通変数である時間を消去したことが原因である。物理現象としてのカオス現象は、共通項としての相関変数関係（無限的反復キャッチボール）と時間が必須条件になる。これを修正カオス理論と名づけた。方程式的には、 $y(t+dt)=f\{x(t)\}$, $x(t+dt)=g\{y(t)\}$ であり、簡単には、「現代科学＝（修正カオス理論）－（相互関係性の継続）」と表現できる。カオス理論では「蝶の羽ばたきが台風の進路も変える」バタフライ効果・初期誤差等を説明する。修正カオス理論では、感性・ストレス・カウンセリング・暗号・2重スリット現象・生命進化・大いなる力・対人関係・公衆衛生活動等をも説明可能になる。

参考文献

- 1) 柳澤秀明：子供には結果至上主義よりプロセス重視を —現代科学の完全再現性に大きな落とし穴— 家族と健康、602,p3：2004
- 2) H. Yanagisawa: Space Time Defined by Stress Equation. EJTP, 2, 11-15, 2004
- 3) 柳澤秀明：感性が医療事故を未然に防ぐ<第2報>—修正カオス理論的解釈—、看護実践の科学、26,7,42-47,2004
- 4) 中央教育審議会報告：少子化と教育について、4月、2000

妊娠・出産から子育てまで一地域における継続的支援一調査報告

一母子保健推進員の活動・大分県玖珠郡玖珠町一

1. 町の概要

現在、人口は 19,000 人余、世帯数は約 6,900 戸で、人口は減少傾向にある。(資料 1)
少子高齢化傾向は顕著に見られ、出生数は年々減少している。(資料 2、資料 3)

15 年 12 月に町が実施した次世代育成支援対策アンケート調査によると、中高生保護者対象のアンケートでは核家族 25%、三世代家族 65%であったのに対して、就学前保護者では核家族 50%、三世代家族 36%であった。

自衛隊駐屯地があり、住民の転出入は比較的多い。古くからの住民と、新たに転入してくる住民が混在している。

昭和 30 年に玖珠郡西部 4 町村が合併して誕生した玖珠町は、50 年を経て、玖珠郡全町村をひとつにする九重町との合併をめざしたが、合併協議は破綻して独自の道を歩むことになった。

「童話の里」をコンセプトに、先人の残した自然や歴史、文化を大切に伝えていくまちづくりに取り組んでいる。

2. 出生率低下への対策

年々出生数が下降する中、今回の合併破綻により財政的な危機感が高まり、出産祝い金が半額に減額される等、子育てを取り巻く環境は厳しくなっている。その中で、「物的・経済的な豊かさ」より「心の豊かさ」「人との関係の豊かさ」を価値の中心に据えたまちづくりが展開されている。保健分野が中心となって、各関係セクションや住民と連携を取りながら、子育ての幸せを実感できる環境作りを行っている。

3. 継続的な子育て支援一母子保健推進員制度一

1) 概要

現在母子保健推進員は 20 名(看護師 10 名、保健師 5 名、一般 5 名)で、新生児訪問(第 1 子は全員)、4 ヶ月健診前に電話等による健診や予防接種への呼びかけ、わらべの会(後述)や各種保健活動への支援、健康福祉まつりへの参画等、さまざまな活動を活発に行っている。また研修等に積極的に参加して、学習したことを地域での活動に生かしている。平成 16 年度は自主学习として『絵本の読み聞かせ』に取り組んだ。

2) 特徴

玖珠町では、母子手帳支給時に、担当の母子保健推進員の名前と電話番号を記載したカードを渡している。母子保健推進員がコンタクトを取りやすいように、その身分を予め知らせておくことと、妊娠・出産中から不安や相談したいことがあれば妊産婦のほうから連絡がとれる状況をつくっておくことがねらいである。いつでも、何かあれば電話していいですよ、というメッセージとなっている。

活動している母子保健推進員は、30~40代の子育て現役の人が多く、ケアする側の新陳代謝ができています。当事者と支援者の距離が比較的近く、少し前に同じ道をたどった子育ての先輩という位置から、不安や悩みの聞き役となり、経験に照らしたアドバイザーとなる。相談された内容によっては、保健師と連絡を取り合い、連携して対応する。この情報共有がうまく図れていることが、互いの動きやすさにつながっている。母子保健推進員同士は、参画している行事の準備作業などの中で、情報交換をするなど切磋琢磨をしている。また、比較的若い年齢構成であるためか、母子保健推進員の学習意欲が旺盛で、多くのことを吸収して地域活動に生かしていこうとする活力に満ちた姿勢が感じられた。

4. 交流の場作り—わらべの会—

1) 概要

子育てに不安を抱いた母親からの投げかけがきっかけとなって、保健師が主導してサークルを立ち上げ、メンバーが運営していくのを裏方として支える形で支援している。幼い子どもを抱えた母親がいつでも参加でき、子どもを楽しませながら親も楽しむ中で、子育て仲間を作りあう場となっている。

自衛隊駐屯地があり、異動が多くて子育て仲間ができずに不安を抱く母親もいる。健診時に、孤立している親やリスクを感じた親にはわらべの会への入会を勧め、経過を観察している。

会の活動は、毎月の行事が中心で、会員相互の交流の時間はあまりないため、会での出合いを核として独自のサークルを作り、気の合った仲間が集まっている自主サークルもできている。わらべの会は、通過点であり、やがて卒業していく場として機能している。

2) 特徴

行政が立ち上げを主導し、その後の運営は当事者を主体として裏方として支援する形で、行政と住民の協働が成り立っている。「行政の役割は種をまくこと」という行政側の明確なスタンスが感じられる。

会が当事者間の関係づくりの場として機能していると同時に、リスクのある母子や課題を抱えた母子の経過観察の場としても機能しており、子育て困難に陥ることを予防し、また必要なときに自然に支援できる体制が整っているといえる。

また、会の運営には生涯学習課が管轄する約 20 の文化サークルを巻き込んで、多彩な行事を展開している。影絵、人形劇などのサークルがボランティアで参加することにより、子どもたちに文化的な楽しさを与えている。またメンバーには退職した保育士や幼稚園教諭がいて、子どもたちの扱いにも長けており、世代間交流の場にもなっている。

3) 課題

会を立ち上げた当初は、協力的なメンバーが数多くいて会の運営を担っていたが、最近親の質が変化し、楽しいところ、よいところばかり取っていく傾向が見られる。また行事だけではなく、もっと話をしたり、親同士の交流がしたいというニーズもある。その中で、会の運営にどこまで関わっていくか、そこから派生して生まれる自主サークルとの関わりをどのようにしていくか、会のありかたを考えていく必要があるだろう。

5. 保健活動を核とするまちづくり

玖珠町の人口は低下傾向にあるが、逆に世帯数は増加している。三世帯家族から核家族に分化していることもあるが、外から転入してくる世帯の永住志向もあるという。聞き取り調査を行った中で印象深かったのは、誰もが「この町にずっと住みたい」と言い、住みよい町にしていく努力を自分自身がしようとしていることだった。

町は財政的には厳しいが、良い道路と人が集う場所があり、そこに集う人がいる。そのことが住民の誇りとなっている。「住民の幸せはお金ではない」という価値観を共有して、「お金では買えない町の財産」をみんなで創出していこうという空気が感じられた。行政と住民が手を携えて、「身の丈にあったまちづくり」をしていこうとしている。

この動きの中で特徴的なのは、健康づくりや母子保健をキーとする保健活動が、まちづくりのコンセプトのひとつの軸となって機能していることである。住民を巻き込み、また他のセクションを巻き込んで保健活動を展開する中で、改めてネットワークの構築を言うまでもなく、自然にセクション横断的な施策を行い、住民と協働で活動を進めている。縦割り行政の障壁や、行政対住民の対立の構図がなく、それぞれができることを分担して連携が成立している。

行政側には、「たねまきが行政の役目」という役割認識があり、種まきの仕掛けとして、お祭りのようなイベントを年間を通して多彩に展開している。その中で楽しむだけでなく、課題提供も行っている。

また「健康づくり」活動をベースとして、自治会→地区→町のネットワークができていく。自治会の会長は多くが年度ごとに交代し、多くの人々が自治活動に関わる風通しのよい組織となっているのも特徴だ。

6. 考察

玖珠町の子育て支援の眼目は、継続的で自然な形の支援が、行政各分野や地域住民との連携の中で行われていることである。その底流をなすのは、行政・住民を問わず関わる人たちの町への愛着であり、自分たちの町を自分たちがよくしていこうという意志である。

もう一人産み育てようとする動機づけには、現在の子育てから実感としての幸福を感じていることが重要であろう。その実感の形成には、狭義の母子支援、子育て支援だけではなく、日々の生活のベースとなるまちづくりが大きな意味を持つ。

玖珠町のまちづくりの基本的なコンセプトにあるのは、そこにある自然や歴史や文化の価値を伝えていくことであり、人と人とのつながりである。すなわち、経済的・物理的資源ではなく、人と人をつなぐもの—社会資源（ソーシャル・キャピタル）—である。

当事者と支援者が同じ土俵の上でつながる母子保健推進員の支援のあり方、文化の継承の場・世代間交流の場であると同時に参加者同士がつながる場となるわらべの会、そして「転入してきて古くからの住民の人たちに本当にかわいがってもらった」というように、新来の住民を温かく迎える地域のウェルカムな雰囲気の中で、この町に永住しようという意志を生み出す土壌は、この町にあるソーシャル・キャピタルの豊かさの証左だ。

少子高齢化、核家族の増加、親の質の変化など、この町にも社会構造の変化は押し寄せている。その中で、いかにこのソーシャル・キャピタルを伝え循環させていくかが今後の課題となる。

妊娠・出産から子育てまで—地域における継続的支援—調査報告

—母子保健ボランティアの活動・愛知県新城保健所—

1. 管内の概要

新城保健所の管内には、新城市、鳳来町、設楽町、東栄町、津具村、作手村、豊根村、富山村の1市3町4村があり、あわせて面積は県の20%を占め、人口は約6万6千人である。

表1.

	新城市	鳳来町	設楽町	東栄町	津具村	作手村	豊根村	富山村	合計
人口総数	36,026	14,371	5,305	4,717	1,654	3,226	1,422	209	66,930
年少人口 (15歳未満)	5,650	1,810	600	502	188	486	153	36	9,425
生産年齢人口	23,132	8,489	2,776	2,313	842	1,699	669	97	40,047
老年人口 (65歳以上)	7,240	4,066	1,929	1,902	624	1,041	598	76	17,476
昼間人口	35,109	12,151	5,527	4,616	1,580	3,206	1,491	237	63,917
総世帯数	10,681	4,066	1,847	1,690	575	956	420	99	20,334

総務省「住民基本台帳人口要覧」出典：MC 統計 <https://www.mc-stat.com>

2. 継続的な子育て支援—母子保健ボランティア養成講座の開催

1) 講座開催までの経緯

新城保健所管内は、年々人口は減り、高齢化率は県平均を大きく上回り、出生数においては激減状態である。こんな地域でも隣近所の連帯感はなくなり、地域で子ども育てていくなどという考えは薄らいでいる現状を感じていた。保健所で乳幼児の母親に対してもアンケートにおいても核家族化が進む一方で、育児の相談相手は配偶者や両親がほとんどで、母親をとりまく環境は孤独であることがわられる。(資料1.)

一方、母子保健計画や健康日本21計画において、住民参加や行政主導ではないと言っている割には従来と変わらない。母子保健計画に焦点を当てて考えても、ルーチン事業の見直しをこれでしたか、たとえていても大きな変化はなく、現実計画は立てておしまいではないかと疑問もあった。

昭和56年に大木氏は母子愛育会の研修に参加し、愛育班の活動を見た。地区組織活動がないこの地域で、この時期にあのような活動が住民を主にしたものできないかと母子保健計画策定後に思うようになった。地域の先輩お母さんたちが地域の子どものを見ていく、おせっかいおばさんや世話焼きおばさんがいてもいいのではないかと。新城保健所管内には母子保健推進員はいない、地域に子育てネ

ネットワークはいるが県教育委員会所属の組織であるため、協力を要請しづらい。保健部門でも何か活動を保健師と一緒に地域をみていってもらえる組織が必要と思った。地域に母子保健ボランティアが活動していくことにより虐待の早期発見・予防、育児不安を持つ母親に対して地域で助け合っていくことにより不安の軽減、地域の中で気軽の相談できる体制づくりが少しでもできること、まちの保健室や子ども110番の家等と同じようなものができ、地域の人々が子どもを育てていくことを最終の目標としているが、現実には難しい。

また、市町村保健師の新任研修を通して、①保健師の家庭訪問も減り、経験が不足しがちであること、②相手の気持ちが分かり合えない、③未だ支援でなく指導していることなどが見えてきた。そこでボランティアを育成していくことにより、市町村保健師の資質向上も期待できるとして計画を思い立った。

2) 実施に向けて

課長に相談し、新規事業として事業計画を立ててはどうかとすぐ後押しをしてもらうことになった。次世代育成支援対策推進法が追い風となり、予算確保もでき事業として母子保健ボランティア講座を開催ができることになった。

新城保健所管内は1市3町4村で、それぞれが小規模市町村で事業を開催することは難しい状況にもあることを考慮し、広域的に事業展開のできる保健所が中心となりボランティア育成をした。事業を開催してもこの地域でボランティアとして活動してくれる人が集まるかとても心配であった。保健所では人を集める手段はホームページの掲載くらいで他に方法はないため各市町村の広報にも掲載してもらい、特に新城市保健センターとしてもこの事業に対しては関心があった。必要性は感じ人集めにも非常に協力的であった。住民検診時にチラシ配布や各町内会への回覧板など作成をしてくれた。また、ボランティア活動をしてくれそうな人に声をかけてもらい参加者を募った。実際には広報を見てくれ多数の方が応募してきた。32名の応募があり当初計画をしていた30名を超えることができた。

3) 講座の概要

講座内容は他市で実施されている母子保健推進員研修等を参考に計画し、ひと月に2回ペース計6回コースで実施。一回2時間。平成16年9月より同年11月まで実施した(資料2.)。出席率は比較的良く、毎回30名前後の出席があった。地域の中での視点については実際地域活動をしている大学教授をお願いをしたり、母子保健計画の中に救急蘇生のできる人の割合を増やすとあるため、救急蘇生の実習、なかなか保健所サイドから介入が難しくなっている(市町村側が閉鎖的なため)乳幼児健診の見学など講座の中に盛り込んだ。講師探しで苦労したのは、子育てネットワーク以外で実際に母子保健関係で活動しているボランティアを探すことであった。また、保育学、心理学の専門化が講師となれば聴衆の感動は大きいと思われるが、予算的制限もあり、講師探しにはこの講座だけでなく苦慮している。

4) 講座後のフォローアップ

6回にわたる母子保健ボランティア養成講座を終了した後、新城市が中心となり保健センターにおいて母子保健担当の保健師2名が同席して講座終了者の会合を月1回設けている。ボランティアとし